R116
13
1843

宮内省
圖書寮

明治
43. 8. 29
内交

四月　脇能

養老　前シテ　後シテ　尉　養老山神　ワツレ　男　ワキ　大臣

九月　二番目

清經　シテ　清經　ワツレ　女　ワキ　法師

三月　三番目

采女　前シテ　後シテ　女　采女　ワキ　僧

九月　四番目　又三番目

通小町　シテ　深草少將　ワツレ　小野小町　ワキ　僧

五月　四番目　略二番目

小袖曽我　シテ　曽我十郎　ワツレ　母　曽我五郎

養老

風ヲ樹ニ求ムレドモ樹ハ静カニナラズ　元二十中一ヲ

ヌ枝ヲ子ニ思ヒ子ハ親ヲ慕ヒ　ヲ中ヲ　ヲ中ヲ　ヲ中ヲ　ヲ中ヲ

皇ヲ仕ヘ奉ル臣下也　佞ヲ濃州本

巣郡ヨリ不思議ノ泉出ルヨリ

養ヒヲ思ヒ慕ヒ給ヒ宣旨ヲ

任ヲ受ケ濃州本巣ノ郡ヘト急ギ

三人 流るゝや國富民を豊かにして四方より
道ある開の戸に秋津嶋ねやあ家ぞ
かゝるひあのさうひよりあの沖の中
道狭く粮荷の離よ雲はきりく
二人 年を経し苔むす水乃緑う那
む山の松陰よ粒はそ
の坂ゆく人安きぞ心うれ故人眠し

奥 尽くさるゝ夢の六十年乃花よと心へ
茅店の月よ鶏雨さゝ月ハ板橋の霜よ
霜ひ白頭乃雪と積るとも老さや
あの離の水やこゝろを清むらん
奥山の深谷に流のたゝ乃や流
きを汲とよ年絶ぐく長生
乃家よりそ老きぬ人あるある

よ。昔を年ふるしるべ。番乃ためしと。松陰の岩井乃水を掬まく
惜ぶ。者をつべくることそ。尚行末も
ひさしきれ。ゆゑ。めつら見成者へ
勇めべきなれは。洗ものやまくは
かゝる事をて作ず。あとはゆゑ乃
しる親子の者ゝ。すゝびゐこそ親子

者をてゆへ。昔い帝まと乃勅仕まく
あるべやよ。世を紙や雪年遥よみ
うゐゝ。我大君乃ことのりを。賜さ
ゐとして。今家るト乃有紙をよ。
社親子民まく。仕へ。拙を洗本巣
の郡よりぶれる泉出くるよりを奏
関を。忍ぶみくまれの宣るよ任を

見て直和仮をトちるを也そて糧米と
名付てあり謂て要事べし（シテ）まゝ
乞ふ山に此厨かみてんぐ（アサユフ）鄙へ山に入（イリ）
薪（タキヾ）をとり拂らを育（ハゴク）て家に帰る時
山路（サンロ）つゝれなや洗米を行と多く掬（ムス）び
こゝ丸めて寿（ヨノツワ子）常（ツレカル上ハ）あらば四も涼（セイ）安つゝ
たをとり

ぶくやとゝ多きられつゝぶやゞて家路に成
運（ハコ）び父母に見へ（シテ）と多くあるれば（シテ）春心（コヽロ）
より心ゝ頃（ヤガ）ゝ老を忘れ水れ
朝（ツヽ）ぎいの床（トコ）を起（オキ）うからびよるれ寝覚（ネザメ）
をまびからでいりむいまし水の絶（タヱル）
ぜも苦を結ふ故に餐（ソトミ）の離（ソトミ）といか
也（コトワキカル上）ゝゝやゝ有難や拙く入の薬の

水でも離れのうちにもぞ住居
のあるやうん　洗滝坪のぞ
こしけ方の岩間より出る水の泉也
掬（早カル）ひ乾かと立寄りこれぞいたぎよき
山の井也　底（シテ）をみ渡るまでれ石乃岩
ねとありて苔の（ワキ）生まやちよ
乃あ（シテ）ちも　まつのうりある薬

の水（早）　まことよ巻を（シテ）　粮（コト）なり
巻（ヅ）をだよ粮（元八）ぐ　まして感乃人の
ゐよ薬（コト）ごとあらば仙（アイ）色も寿（ジュ）命（ミヤウ）を
畫（ヅキ）まづき泉（中元）ぐめ（コト）たかりきる（ヤヌ）ぞ（元）
やま（ヤマ）水（ヅト）の（元）ぞ（ミナカミ）とする（ミ）ぜ（ヨト）代ぐとて流
乃（元）まま乃（ト）抜（ト）らまぐ豊（ユタカ）よまとある（ト）姫（コ）さ
よく（ヨコシヲ）（クリ地）　（キカケ）ぞ　ぞ（元八）や寿（ヒ）ぐ（元八）を蓂（ヨモギ）ぐ鴻（元）

とき世にいとうのためもいく葉水に
氷なりを畫ぐ　先ゆくりの流きへ
絶ぎて　さらを本の水よあらぐ流
きよ浮ぶ　うらうら消かつ結んで
ひさくまめるなるや　はよ見
いるめを夏山の　行水乃葉とある
さぎをを誰　羽ひろ　いざや水を掬

ぎんだくく　水ぬもぐん　甕頭の
竹葉ぬ　陰やみどりを重ねらん　昌邸
簡乃　萩花ぬ　林葉の秋を　ぬありや
晉　若七賢ぐ　楽ぐ　俱倫ぐ　飛び　洗
水よ　清　きうぐめ　やくめ　薬を　君の
ためよ　拔ぎん　曲水浮あらむ　石よ
さらりてれうくとも　ぎよ　先とりく

ぬるもそぐら引くにもぬうもやあれ
くに月をくまうよ　山路の奥の
水をてい行きうん人の粮ひ　彭祖
が菊の水ぞ露の粮ひよ　仙徳
を受しよりぞ百歳をふる丹を薬
の水と受あを　宮や薬と菊のろ
ぞ其粮ひの為乃まうよ　ふ年をふるや

あめつちに　ひらきそめの草求を
花候宮ぞ為り　其わと云あぐら
百色雨露のめぐこ　粮ひ乃
てゆかつ父母たるる家の翁を養
ひたく泥水よあれ良乃　油ひぐらく
掬ぶ手に隠さへる山の井ぞも
華と思よりぞ若の為も若水とみる社

焼かりきれ　　ロキ内　こえ方弱き葉の氷

急ぎ切りて我君よ養ぬを愛でこそ

シテ内　うすがきれ　　翁もかくもとめぐこぴろ

き所かげを左ふとめべ　　ロキカル　動使をかき祢

て感涙こぼかし

上ロ時　しひもあく祢べ　　キドク静　ふ亭祢よ愛てみと

きりかやまく　　ロ　ふりぎやおぷく天より

　　ロ　龍乃響を声をみく

音楽聞く花ふりぬ見ぬ物と思ひ

ねシテ上　中入来序出端　有難や治まる世代のあら

ひて山ぶ来れ　　ロ　ずやうよ五月の風や

十日の雨かぎ　　ロ　ふりて日乃光り雲は

あらじ氷の　　ロ　ぬ泉をよを畫じ

ぬ有かうきぞ　　中入来　ねやか　　上北　見とても

誓ひ同じ法乃氷　　ロ　ぬ代を守る

なる　我当洲やま山行の宮居　地　亦い
楊柳観音堂　神とゐひ　地　仏せゐひ
叫き水波の隔ゐく　地　宮滝度乃
方便の聲　栄の岸やゐ乃水音
とうくゆく　上句五八八　柏ゐと楫へて音楽のひゞ
き　五八八　諸天ゐいきよ
の影ゐれ　上ワカシテ神舞　松陰よゐ春とうつる

みぞりちゐ　上地　ちもいさゐよきゐの井
水くゐ　水音とうて
波悠くゐ　五八八　ちきゐる時代乃君ち
ゐくゐ　ゐよく紅と浮へく
てゐよくゐ　ゐ代とて栄へ
さてもゐきゐ　ゐ君よひゐ
ゐ水ゐ　ゐ時へ　ゐ深ゐ滝

津の水門をさしてくだる
波の音もよさの海代あしやぶ
みうらの浦に高瀬乃みち

終

清經

八重九塩路のうらに波八重の塩路九
浦浪九重よいざやゆら〳〵早内
見て
左中將清經乃はゆ内ようへや淺津の
三郎と申者まてはゆ拙も頼りの清經
いそとゆ筑紫九軍ゑ討まきゆ都へ
申遣ら奴道まぞ乃報音の手てからん

よりて思ひきるが豊前国柳ヶ浦に
泊まりて更行月の長夜より身を投げ
ムナ
ぐ〳〵成給ひぬ船中をひとしれば
オンカタミ ビン
ぼ形見と鬢の髪を切り
イノチ
ぐしの命たとかり御簪を抜き今
ハボ ウヤ
都へとり作る洲程の鄙のまそびよ
ヲヒ ウヤ
引こて〳〵商うへる高弟昔の妻よ

引こへ〳〵ていおうき大菅てたゝや時分
ヲ ウ
ゐる掘家をとる独り身のたてを思ひ
ハボ
くよりきり〳〵 息い程よ長い
キや都よ長くぼめりよ事中つ
より法津の三郎ゞまゐ〳〵ぐ
オン ワレ女
ぼ中へ仁法津の三郎とやが人を
コナタ
元方へ来へ掘り入今へ行乃為

の使ひ使ひ申さう　ワキ　けんぶ面もあきは
使よしまりさん　女　面もあきは使とは
ぞんは道世さう　モシゴトンセイ　ワキ　いや所道世ふ
ても世なさん　女　過ぎ　施盛の軍
みもはつぐあきと　オン　弦やつるは　ワキ　けんぶと
みも施盛の軍みも　オン　はつぐは面あきは
けんぶ清經心よ思ふもうん。都へ　トテモ　は世ゆら

ぬ道世の朝　ザフ　兵　ヒャウ　の手たから安よりへ
と思ふききるか　ス　豊前國柳ヶ浦の沖
みて更ゝ月の　ヨブ子　夜よりまと　ナゲムナ　投ま
布　シク　の波ひさん　ナスル　何ともあぎ空敷か
ぶたるとやうら　ト　めてやせあて　ウタ　い詩き
きゝ　ゾ　又やまの　エカ　康の家とも清ちば
ガ　ゴ　ゾ　ド　ド　ド

ゆ。偽り叫つるねこうれ。寝ても
其うひしおきあるあきを世に
仕ものもうれ。世中は浅ましう
人目をつゝみ我宿のく。垣の荒
吹風乃おとをもたゝぬ悪びよあく
のこゝ成ぬ。あはれ。はうれ。
ゆ。明月のよ。ゆ。仕ら悪ぎ。子規か

もゝ。ちぐ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。れば。笹よ。髪れかゝを強。直れて
見を。て。て。て。て。心を慰められ。へ
見ハ中将殿の黒髪。やこれ。で。目もこれ
心まえ。も。男乃。まさるぐ。やみるびよ
心盡しの。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
やこゝ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

涙とたよりねの夢よりもみて絵へ
と弱らきぬよりかくるまくらや窓をさらし
まらせ〳〵召人へよ夢あり弱あつ
く現とみる眼裏よ塵ろて三界をぼく
心頭をすりて一切はひろ空やうと
知るも夢つらとこもまぼろれ
いづき弥ある雲水のゆくも帰まも圓

浮の故郷よたどる心のそうれさようて
ねよ窓きく人をみてより夢てよあ
へ頼こうあらきめよりへ人清經
こうしまりてくへ
枕よみ浮へぎ清經まく海ませ
ぜ正〳〵をおぎ長へまぐ夢あらで
いづこうへべきぞよ夢ありとも片安

をみえ給つゝ(ヒ、ト、中ヅ)ゆく末(ヒ、ト、ド)をかぎり命を
まつ(ヅ)て我とゆ(ヅ)をぞ(ヒ、ト、ド)ちをぞ(ヒ、ト、ド)ちをぞ(ヒ、ト、ド)ちを

廿

かたるゝ　形ぞつらき　廿　くろ髪は

上言　うらみをちくへよりひうへてゝ　く　狂る

源乃手枕をおらべてゝ　又　かあよ

あれどうらゝ　きば　猩猩のゝ　ぐ

あるゞかあ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

うきれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

とゝをぬらし　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

詠てゝきやうべ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

上　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

上月　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

浦ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

論ずべしとて、弁馬七さを、金銀、絹、
乃ぱぐぎ、お、幣のため成べし
女上
加様、ようを、ぐ、形、も、分の恨、ふ、似たる事、
あれば、ぐ、ぐ、ようまま君、まぐ、ぱ代乃
ぱぐ、ぐ、ぐ、

よわり果ぬる。秋の言ハ
三寶も捨果ぬ。心ぼうそう一門ハ
氣とう。おひカをわ〳〵て色よハ車
はそぐ。富士幸。おる氣ハ
宮殿。かゝやきる家。長門四へも
敵ぬ。ちべ〳〵。毎ゝ家をいづく
ともおぼ。れ。ひ。ちぢ氣おる

ぬ。やせ中のつ。つる夢社城おれ。保元れ
歎の花。青永の秋。紅葉。て。おぐよ
おり。浮。ぬ。一。墨。れ。毎おまや。柳ゞ。蒲の秋
凡の。高。手。かほ。なる。波。ちぢの
ぬ。きみる。松。れ。ば。深。のそ。もおびひ
多。勢。て。時。を。き。家。清。盛。心。よこ
めく。思。やう。言。ても。幡。ぬ。徒。宣

あらたに心魂に沸るとわり、神仏に直乃
ぱうへに帝り給ふと唯一筋に学とり
上にて乃あぢきなやとてもきゆべき露乃命を
枝に残れぬ散ぬるまれ残ぬ散ぬるまれ
あまたびよりくいつまぐらうきめを水
鳥の空にてんとるきりへよいぐ
中下小穴 穴仁仁下 穴仁仁下
岩代乃まつとあるりや暁の月に嘯く

きゝまゝく船のへて立あぐりおりより
横笛 軸 板
やうてうぬき出し音もまこやうまき
あらしに成やうもとうひ朗詠とかと
行末をかぐみく絶ぬよいつらあぐまろの
ぱらぬ吉いつへとまらぬ吉心畫に汎世
とても様ぐ乃ぱ笑ぶ砂ぶびやとよそ
めよいひのふる狂へ人やまらんぱ

人行たみるめを如りの浦のそら。西よ
り月をこれば。やとれもつきん
と南無阿弥陀仏。そぶ如来向へさせ給へと
一声を家ゐ。母よりつと落塩
の底のくづと。きうきの果
ぞ悲しき　いよ心もくれそとりつき
ね浜の波の恨ばかりきる袖

れいまらくも同じうたか
たの気ゐ。もかつらぎ山　柳屋
道よりもちこ雲。ぎつきをかき
ぬめ書筆ぢきぬ清鉢山ハ鉄城雲
のたてをつらぬきぎうまの鞍をう
ろ。形見の眼の光。欲のいち通
玄道場。無明も法はてぬ敵つハ

波ひくゝ[元]ほ[ニト]西海[元]海の国果[元]をみを
くゝ見[元]遠[元]ゝ[元]ゝ[元]ゝ

物ごとに月ぞ、
踏るあ[illegible]たりのさ
霞深草山のもとつゞき、木幡の岡を
きさてえらぐうぢ[illegible]の中宿に手れ星
とまば見ぐ奈良坂やかもぐれさと
よつをよきりく
いとよ宮ぐ心おもよ狩事さぐやと
思ふ上宮路をぐ[illegible]き妻日野のく

中[illegible]
寺ぐもいざやとらん 更上 更闌夜さぐ
ふて、四可神の寶ふよ。秋ぐたる
燈ぐよを背きぐる歌ぐぐ。芦よ傳
深夜の月。眺ぐと松の木ぐまをそり
くれば秋の夜心ぐもたくあなくやたぼ
ぐらを月ぐ花の陰ゆく宮め
ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]

ぞ。そもる樣の雲ぢ庭。まゐ色うへくまら
さまの。花を。屋きる藤の。ぢあくまを
を。妻入。きゝ。きうれく。めあ
見る女性。寿中べきトの作

女 こ方の事。みてい如何。まくぞ

ワキ 見中きぢこれ。狂ぢ。まる。ま。樣。
ぞ。まくぞ。方。うる。ぢ。ぞ。不審。ぞ。

女 依て當社。ぢめく。所。事。の人。て

ワキ 仕入。う。ぢ。ん。ば。如て。此。可。ま。ま。て

女 當社の。謂。妻。ち。ま。語。へ。 作者

社と中へ。神。讓。景。雲。二。年。ま。ぢ。内。國

年。宮。より。ぢ。山。妻。首。山。本。宇。の。拳。ま。歌

向。なら。せ。ぢ。ぢ。れ。ば。此。山。本。を。楠。山。の

陰。ぢ。の。さ。く。不。陰。ぢ。ま。を。お。か。り。ま。を

陰頼まむと歌原や氏人よりてうゑ
し木代本をもめぐこ海さゆ給なく
かうよ太山と有ぬ紀きび宮社の伝
ちうれ木代人のし手宿をう形きき
だこ乃樂雲一葉もきくうよ付くや
生ぬべきと憶こ給ゆ行ゆ歌人の
見づうれたぎきさ木代陰海のれと今を

みゑ法師の親をうゑ墨なりぎ形ぎ意
楽萬行乃月歌ハ三笠の山よ長岡
みく。五重の塔諸の月乃ちりぬ紫月代
きたくすを形ぐ陰頼をたづま分
ぬかりそめうるとも草木國土成
佛の神木と思ひ給ふそ
上ゑ
あらゆるの其初め治まる國人久方

れ。ぬ。ぬ。こだひ。みどりよ。花ひらき
香ありて。仏法流布の。ときなり。昔
き。霊鷲山。にして。妙法蓮華経。を。説給
ひ。衆生。を。度。せ。と。度。を。大明神。と。顕
き。此山。を。信。へ。ば。鷲の。たゞ。ともゞ
蓮華山。を。信。ぜよ。扨。曼陀羅樹の。木陰
とも。感ある。藤。て。杉。も。紅。を。出。

山。長。国。浜。へ。霊山。に。海。去。の。春。よ。ぶ。ら。れ。
めや。〳〵。いうて。猿沢。の。池。て。
隠。れ。き。る。池。の。ぬ。を。は。ぬ。ぎ。られ。ぬ。
所。な。る。る。石。池。に。教。へ。山。
へ。ち。出。へ。昔。こ。う。猿。沒。の。池。に。こ。
思。て。を。細。つ。へ。ば。此。池。の。邊。に。法。経。を
よ。ん。仏。を。ま。ち。こ。へ。安。国。乃。

佛事をばさうしてべき供養と心ざす
て日向申べき　女見いもうと采
女とやしの人池水を投給ふ
所なりざれば帝御覧あり
わぎもこが袖ばかりとさるものの
池のうきもとゆらるれきと嘆る音
の心をば去ぬ　早　給へ

女
世天竺帝の時に独り身の采女有
がうはなくして君に仕へ一人ならあり
初は親兄弟ありざるこのほど御
心ばせをばあらぬ事をうら
こしまらきて池水をおぎ給へ
所也　早カル上　給へ我もきみびの帝

あるとき男ども、此猿沢の池に遊びて
女方 采女の死骸を髣髴あらせけり
早上 ちぢのうつくしう
女 翡翠の
ざし 蟬の鬢 かつら 眉墨
早下 たんすの底 早中 黒髪の姿引うつく
早下 池のそこにうづみすてられたるもあるべし
上言 思ふらく
女 なげてたまへ姫を

猿沢の池のそこにうづみすてられ
悲しきと歎きよる魂。天にあがれ
ちりとして
たとへばみなもの水の月とる猿沢のいけ
ゐるうねとてほろびやすい
早上言 池水に入よりと池の底に入よりきり
池の浪よりも高くなりて。

よみがへつまと幻乃ごとく
ぞうら無常ぐ水泡なるべし
解脱とうるあれども
とりわづく芸とてあらばうらむ
さる沢の池乃巣の
とうらひ給へとよ
何よ顕き給へ

（ヲ）（ヲ）（ヲ）

あり采女とお思ひ給ふ。されども有へ
つゝらるゝの南の岸よりあるゝ見ぞ
南方無垢薬師まゐらせんとすれども。東をやく
宮やいつくへよ奉る郡乃代をへて
神とおもう道をぞて国家を守る掾
とうや。みまきべ君よ仕へ人甚おもはぐ
荒て相ぬ年にて。なりて采女の君乃

ぞう浜乃心をくだぞ。ぞ。ぞ邊よ仕へなる和
けりまぐぞよ。ぞよ。ぞ。ぞ。ぞ

あぐや宮人大君心とのがるもしは采
女成るなの加てらきを永ことの世乃
露し情よ心とけ歌感ふ人くたおぐ
うりぢ乃ひあさの山陰へ言ふる山乃井
ひあさく言人を思ふの心乃花ひらき
風をきて散り雪ふ安今をあを
とりや〳〵弱きさだ采女乃戯きこの夕
音ようつる花鳥けどさよ乃ぶ雲乃
独りけもぐまるやさらだ夕の沖乃梅の
みきり折こを采女乃袖乃ふ袖へて大
宮人の小長袖探しとかざしあたより
げもとれとるを色ゆ花あ中を山の華
歌の曲指をそうへ狩ちをひるぐ乃て
梅遊楽快然ふる采女乃袖ぐたへある。

たゝえ物や典侍宮乃有時沖出雲
をびく口りの月まつ、ほ
とぎすさうひ息するに歌をとうけ
て将軍乃月なもの序舞 上女ロカ月なき
むらで雪のやとぎし 地 天津
そらはれ方に迄よ
あとあ霞なづとも降ら無ほあら

なを松の枝乃間ゝ敬うせぎ去く正
木乃うづらなづくつ鳥乃沼ゝ
天地やるよ四方安穏よ海波なす
なり女ト中 猿沢の池乃面ゝ澤の池
雲面よ水溜とうて浪まいうく
なりとうやせさこゝ又雲起つく風八
そうようを打なり疏 鼎 拍子乃舞よりぐら是

年女のたそがれまでとみぼとをよ讃仏第
の因縁ちかめをよく弔ひを給へ中と
てう浪よ入まりまう波の鹿よ入
りきを

早川

通小町

見へしハ瀬乃山里よ一夏を送る
僧よりく作家よいづくとも忘ぬと雅
一人毎日こ乃ぬ所ぬ木を持てきたり
作ピロも身りてらぶ所者ぶと
名を尋ばやと思ふ上ひろ所木
もたきあのく白ぬ袖ぶ乾き

女上 ゑい市原雅の
あり 侵 あてい
梅も 鶯の山ぶ 貴き人の出 いり
い程よいつもこの三つまぎを持つく
まり人 ケ 日もよまみらぎやと思ふ
めりよりいぶまの社参りて人 日下 いろも
来まる人 ケ 日 へこの三つのうぎ出
物語 モノガタリ 人 女上 ひろ この三仕ニラ ぎ

地 日ろこの三つ あるくぐ 女 いろ人へ
あり 車よ仕ぐ する 雲 ろ 落
上地 忘ひ 手 人へ 家のこ みよ 女 人へ
九 かきのほ 柿 ぶ ぢ ぐり
上地 意の梅 女 蘭の 桃 ろ ある 樣
あきの ぶ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ
ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ
ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ
ぢ ぢ

ぶ(元一)ぶ(元又一)ぶ(元一)ぶ(元一)ぶ(元

とゝいたゞ荒れびきとありぞれを
の小町乃手也ぞ俗ハ髪ハ有もなく
又女性ハ野小町の幽霊と思ひ
狂よ彼市原野よりよりぞ
を吊らんやと思ひ作 上ノ句 て乃草 部
を立出ぞ 露まぎ
き市原野べよ寿 ねかぞ 具をのべ

香をたき南無幽霊成仏覚出ぶ
生死ハ詩 詩 提 女上 一声 ゆゝ乃ぞ僧の
とゝらひやお同じく き戒ちづき
出僧 いやゝおまづ戒さづき給ゝ
恨ハべぞ ハ 僧 女 こへ
いよゝ屋くゝ ハ法 ハ其者
患をゆきんとや ふりみるだよか

あまきを出ず一人佛道をおらばわが
男なだもさのかうのちよ寝かさねくう
きめを三瀬川よ流さて御出僧
乃ぞづを絵へるうひもなるまじやや
早絵へや法僧散ちち上歌計上寺門上も其分へ
遠ふくもう戒力よひろれば御どかい仏
道をうばらを苦よ戒をうを見へ

女上
人の心をたらう雲乃秋いくもらで心の
月出くれ僧よとわれんと高れて
うきを出きれば
つめどわきもよ
出ぬうぞ
女上
あひきを山乃うきをきふくまねくとち
うよと鹿るまじ
大せをなつくぞ

女上 ねうらの姿や 弦をとりくしとゞもる
女下 ひろまる袖も 上同 ひろまる 我弦も 元行モヲヲ 早同
ども 深の露 深草のゆ 侍 拙ハ
小野小町四位 ゐかねくまゝ
や迷乃ゆ 車乃榻 百度通ひ
しるをまねうぐ出をく 女上 ねと
より秋き白雲 ゐ乃 ゐ迷ひ乃ま

きくとい 男 ゐをゆらぬ車乃榻
ゆ百度通へと 偽 ゐ 男
暁ごとゆ君び車乃ちぢゆきば
女上 車のおゐもつくま やゐをとへと
いてこそ ゆ車ハ云ゆなびび
女上 いつの男き 上地 ゆ 坂の寺 番の星ゆ
あれば 君を男へ ゐ ちハ 女上 拙を

すぐるを　笠よりの乃浮世
とや作乃枝　月よりも暗らびて
けりくゆきたる　独をうちたらひ
けりて雨乃夜を　目ゝ見えぬ兎
さとにもたうろ　やうを屋くを
もらぬ時だもも　引掛よるなぐ
乃夜うぐらう　乃夜やゆかぐれを

ひとかぐらぬ　れたひう那
ぐれをなすて　をかるぬ思ひ
の月をまつら　月をばま
つらんもをべま　でぐらでを夜
あうつきを　がずくてほさ思ひ
かれたなら　れたなら鳥もよ
あきを鐘もたぐ　なれぐそあきをなぐ

やとりねもらべつらからず　上ニ　かいやう
くさぐさを畫しくて　上ニ　褐の
狩ごろもなりてこそ　九十九夜ありし
風やとゆきやうきやうやて　夜日入
あるまぬ　ぎてかうかぶすぐきいよ
立そかぐ　かざわ五ぼ
蓑をもぬぎまきて　花　衣　摺ごろ

もの　色かさねうらもちもの
ぬぎぎそ風　侍らんあを　あら
いそがやまとやまを　上月　れ
弁の狩衣の袂紅ひきつく
つひ酒のめ　乃ちづきな
まとくもいまめらざたまを
ぬ一会のはりまくはほく

乃つゝを滅して小野の小町をば
侍も苦よ佛道にぞ入りにける

小紬曽我

第四人

命をしかば隠さんと富をそ
野をかうよ見へそゞれ牛郎
拙成ては拙も頼朔つゝ伝猟
よ沙汰せん同神らも元ぬ是
成時宗は毎ふく者れ勘當ふて
は程よ御ほ引つきて伝りよ法

出ずやとぬい時、そしい建久四
年ばかりの半ばの雲、五月雨雲
よふりまぎて、かつこまだらやもらふ
つぼそうけ鹿の星月夜、鎌倉殿は
はしかの作法、ぶたびひきはぶ
東八千国の兵ども、皆ちぶよまる
ぶれ、ぶくめて敵の祐経も、ぶ信ま

さぬ事あらじたくひうつ迫はぶ
夏野の鹿ありたぶ、ねらひくべやと
まひらをの猟人、まぎれうちもる
人きぬ大内山ぶ、ぶかもも木陰
てぶきとみえぶ、梓弓やごろ
よあらべ鹿より、ぶ祐経を射ぶめ
てぶをぶの根よあぎぶやと思ふ

立ぬつるうり家たとへば君ぬ世とゞめ
ぬ元又それとても数あらぬぬよいあう
あう元恐きあ元見て指沖
侍仕へ菓まゐりて事ちう
ぎるまてぬうよ事門ヤ弱まて
ば庭ぬぬや祐成乃仏まゐりまてん
りんば菓ぬ乗る由ヤへ見てヤ

ぬかう殿より乃ぬ寝よへ祐成乃沖
まりあらべヤと所宗ぬまりあらべ
おヤうと伝ぬまれてヤ 吸菓ぬ
まゐりたるとヤんへ めヤまりヤ
祐成のぬまりまくヤ 母ぬ渋方へとヤへ
ぬめづらや十郎殿ぬへ乃沖で
ぬや母ぬためよ態とよも はんば

久しくまらびん程よ向顔乃ため
富士のみのりとやは程よ　母カル　されば弘
男子ゆよ男が為ぬ特よ出る次で
ぞや　シテ上　トト　いつし親子乃出たいふれめ
づらかぼようらかやと　トキム子上　男か
ぐらも所宗ぬきう乃ゆ有れば物の
陸より　ヒヤ　トト　日上　ロ元　ロ元　ロ元

出でぬれ日本一の碁打ちぞんじてゐ
ぬれども碁打ちあつまるかぎりの局を
つくやきれへ碁ぐらの碁きぎんいぐ
さりかづくに問ぜえまゐりまず
碁を碁仕をあつまるで碁でまゐり
作へめつまま碁首の局時宗が
しまりつる由りまゐくやうへいたつら

そり乳母返心替りかはそぐ形の碁
火代野寺出くだるなぬぐや時
宗がまりたる由それくや作へ
碁つぎや猫ぬ入り来りぬぐこ
乃禅師い寺まありぬれあらでこへ
あるる時宗といふたるやぬ男日
出ぬりぬ根乃寺ま布箱まと

こしえを者うすれあらば毎ゞ出家ふ
あれとやしをきのうぢりをゝほどて
動者をゝよれて見まで来れるを
ぱ重てゝ動當とやぱ豆箱根富士
梅現も古覧をよるほけ及も動者と
ときちうごとゝ志部を遣戸をたらく
うへられてをうぎんとや家方もあま

此ゝ子おうたくや責て今ゝとめ
ぱ覧見慢もれりあら情あ汁
事や結ぱ者ぱ者らで財宝ゞ
どきうりたりことよきゝと中門を
入やをつりやとあゝとまれきで
招かきてゝおうをきゝをくゝ来を
たりぱゝれてもれやゝ杖あゝう

きれば法師ら[ヲ]たく[シテ]掛[ケ]きぞんハ[ン]
何とぞ庵作ず[トキ]いかゝ[ア]乃御機嫌[ゲキ]
みちく[ル]かゝかゝ[ア]ねく[ル]れば勤商と伝出
けちきてハ[ア]めゝよ誰ある[ねア]はゝ[ア]ハ
母
附字ず事ゝを中さゞ弘成たゝ勤當と
母
ナんハへ[ねゝ]急く[ン]ぬゝよゝ作。附宗の
御ゝを申あゝらべ。結成たゝば勤商

をに伝ちきてハ[シテ]まゞ長[ン]たゝと
ナんハへ。某[ゾンズ]ある子細ハ此度ハ同心[ドウシン]
みてゝ中ちうぼくハ[トキ]いやく
某ハまゝりハ[シテ]ます[シテ]ゞ出[オン]まゝりゝへ
めゝよゝ我ら親乃かゝきれゝ
ぬゝよ隠ゝくハ家ゝよ俗[タヨリ]なく
作同附字ゝを中ル直しつきて

みちよ出べきの処よ時宗ぐ事をヤ
さべ祐成なよ法師動者とびや。能く見
を事ぐれるよ　あ上ぐて祐成をも
祐成思ひ給ひぬぐやたとひ時宗出
家ぐいと度をヤとも。兄祐成よ
郎等も有しぞ。ちもよ男あり
れのれらちへよ捨るとかへつく

はたらりくひて祐成悲の母ぜヤべ
上ぐ口上ぐ上ぐ上ぐ

べ心もうまぬ雲衣の浦鴻ごろ乃
ぜこゝは寺みて明くれをやしを思ふ
あらべ中こゞくよわれとまをもし
毛ト
時宗ぜこゝをよかし法華経
一部よを学え学ぶ者し母と
現世安穏後生善所と祈念する
毎日よ六萬反人会伝仮阿津殿

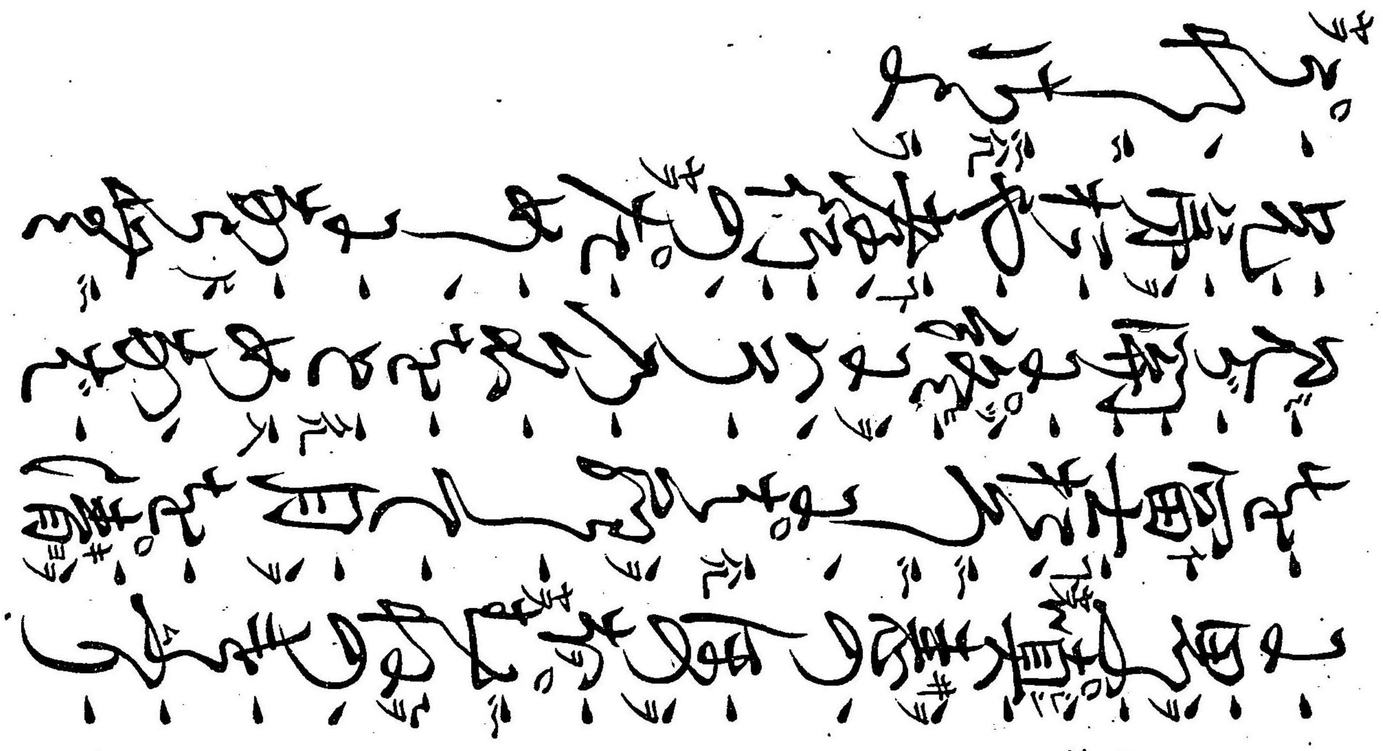
よ四向をるぷほどよ他人会ものさうを
此ことをみきう夢れを恩ぜをしい
きねば出ちそつへちりぐの
門ぷ服ごりさをとおらぬ
なりぷかぷ合まる代おきぷ狩場
や漁捕よ不思あらうひある物を
上ニテ
ヤヲ
其うへ狩ぷ狩場よれいく仏ぷ

昔を思ひいづれば、くの赤澤山かり
くらみて、父もうきたちせ給ひぬや、今
とても、狩場とあらばおぼゝしも、邪心
つもりぎりと、恨ぼゝも兄弟ハ
常にたつく出きれば、母ハ妻をあ
ぎあきとあらへ人ぐゝよ不孝をも
勘命をもゆるすべ、時宗とて

おくゝ出させ給へば、兄弟ハうれ
しきまゝ、まろうべだやゝ、ゝ人を
思ひやりてなさぬたりや、祐成
ナるまゝ、どきむひぞかんだう
ゆるゝあるべぢちうきまりて
狩場へ乃門出いはひて出りゝ
めりまゝ時宗ちうとまりてでの年

月の海にものかげうりナんへけるまでも
上句
光ほど時宇づつをこそろよりて替て
いと面白きいてうの風ぶ思ふ花ものおこり
有難やあまりのうまきてけよ落成
海酌よ言てとりぐ時宇とやもよ
祝言の上地 うたこと 上地 たちきゐを
雲井よあぎてふの根の 上地 雪を

めぐらし葉の上地かげ 男舞 上地 葉のかざ
花其びまよ兄弟めをひきぶれ
やかぎりの親ぶの妻りと思べ源
そつきをぬうの弟とかりうりぞ
よ迄まやあらぬと眼ナてうへる
山のぶ野のうまりれをえて年
秋のかまぶ本禅をとぎんとたづひ



246
183

明治參拾貳年六月廿五日從出版御届濟
同　參拾四年一月廿八日迄
同　四拾參年八月二十五日　再版御届

復製不許

訂正者　觀世清廉

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助
印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂